

優しい心

高松 華菜

(※「高」は正式にははしごだか)

私のおばあちゃんは、私が生まれるずっと前に脳梗塞が起き、後遺症が残って右半身麻痺になってしまいました。右手で字を書いたりすることはできませんが、左手で書くこともできるし、右足を使って歩くことはできませんが、左足を使って右足を引きずりながら歩くこともできます。喋ることもできます。

私は、よくおばあちゃんに新聞の切り抜きをもらって読んでいました。ある日お母さんに、「その新聞の切り抜きもらうのは当たり前じゃないねんで」と言われました。よく考えてみると、利き手ではなかった左手だけで一生懸命私のために切ってくれていたんだなと気付きました。私にとって両手を使って何かをすることは、おばあちゃんにとって当たり前ではないということを痛感しました。

また、おばあちゃんはどこかに出かけるときは車椅子で、エレベーターが必要ですが、無いときは手すりがある階段で一段一段慎重に登っています。外でご飯を食べに行くとき、手すりがない階段があると、お店の店員さんが2人がかりでおばあちゃんを担いでくれたり、おばあちゃんが一段一段階段を登っていると、下の方で登ろうとしている人たちが止まって、登るまで優しい目で見守ってくださる人が多く、おばあちゃんがありがとうと声をかけると笑顔で接してくれます。その光景を見ていると、とても温かい気持ちになれます。

しかし、車椅子だと行ける範囲が狭く、おばあちゃんと旅行に行ったことがありません。いつか、必ずおばあちゃんで行ってみたいと思います。

このように、障がいがあっても周りの人たちが優しくければ助かることはたくさんあるし、おばあちゃんもとても嬉しいと思います。もちろん優しい人だけではなく、障がい者に対して差別の目で見えていたり、中傷していたり、偏見を持っている人もいます。でも、障がい者も一人の人間で、みんなと同じ心を持っています。そのような差別や偏見が減り、優しい心で受け入れてくれる人たちが増えると、障がい者の人たちも安心して日々の生活が送れると思います。私も困っている人がいれば迷わず手を差し伸べられる人になっていこうと思います。